

大基委大評第 149 号

平成 26 年 3 月 17 日

神戸女子大学

学長 中島 實 殿

公益財団法人 大学基準協会

会長 納 谷 廣 美



貴大学の「改善報告書」の検討結果について（通知）

標記に関し、本年度、貴大学よりご提出頂きました「改善報告書」につきましては、大学評価委員会において慎重な審議を行い、別紙の通り検討結果をとりまとめましたので、ここにご通知申し上げます。

添付資料 「改善報告書検討結果（神戸女子大学）」

以上

〈 改善報告書検討結果（神戸女子大学） 〉

[1] 概評

2009（平成 21）年度の本協会による大学評価に際し、問題点の指摘に関する助言として 10 点の改善報告を求めた。今回提出された改善報告書からは、これらの助言を真摯に受け止め、意欲的に改善に取り組んでいることが確認できる。

ただし、次に述べる取り組みの成果が十分に表れていない事項については、引き続き一層の努力が望まれる。

教育内容・方法については、全研究科における組織的な国際交流が不十分であった点に関し、改善に向けての努力はみられるものの、多少の実績がみられるのは家政学研究科のみで、文学研究科では実績が見受けられない。引き続き改善に取り組むことが望まれる。

研究環境については、全専任教員の授業担当時間数が責任授業時間数を大幅に超えており、研究活動が活発でない教員がみられるほか、海外留学制度の利用実績も低調であった点に関し、学内諮問機関である大学教育推進会議における検討の結果、授業担当時間数は軽減されつつある。しかし、文学部および健康福祉学部では助教の授業担当時間数が、家政学部については専任講師の授業担当時間数が増えており、海外留学制度に関しては、内容の見直しは検討されているが、その後も利用されていない。教育と研究の健全なバランスの実現に向けて、さらなる改善が望まれる。

教員組織の年齢構成については、家政学部ならびに文学部における専任教員の年齢構成が 51～60 歳に偏っていた点に関し、教員採用の際に年齢構成にも配慮するなど、改善に向けた取り組みがなされているものの、家政学部で 41.7%、文学部は 31.5%と高い割合となっている。さらに、61 歳以上の専任教員の割合が、家政学部で 36.1%、文学部で 47.1%と高いので、改善に向けて一層の努力が望まれる。

[2] 今後の改善経過について再度報告を求める事項

なし

以 上